



貴
14
3163
90

祇園百葉庵山莊先禪院へ奉り御教乃
在小山門へうへき意象のれを立さうほく院の
お形を墨絵寫丹後ちあはく 喬院のあひよはくとく然志ひくとく
おの通ともうそぞひきく 喬院の辛板欽のゆふ
公として中院通首のゆふ御門人やうりて古今書記
通首公のゆ息女と元文 唐の廉中にてよりう
駒松高見くはるの功運ありえ、無事に上達身給仕
せざるべく 喬院がお車ある年勤め是年三月此がうとく無事完
畢後うらうとくせんじては駒松不落身中院あに給仕せざるべく

ニ至る門へ流しに決心を譲うて不法

正右傳をしま

ニ至る門へ一派と奥の

こもろきくうけ傳ありたり

武あるを今傳有ハ鷹狩家傳
かね後二人に傳する事無傳有
割根ふるく今ハ存不叶く

あれより附の主極志庵が仰る量の勤怠
形さう一端傳ある四天王や称せられ一人の人才二字
氣概世ふ三則うち其ハ極志庵主人とも毛躁ゆく
て中院あわ傳の口は未だこのころも承傳され
先に極志庵没後是中院あ通船公の品漏前と名

後小武者少佐実隆公准大臣号起嶽院當代

嘉道景雲の人

蓋元院門人古今傳後

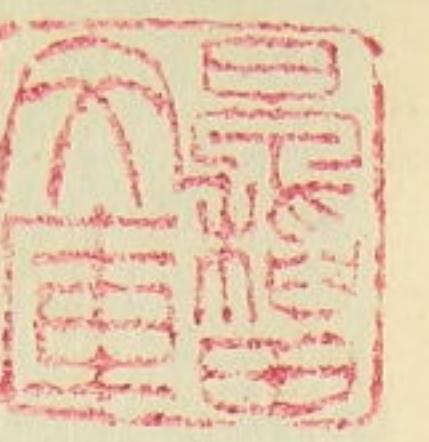
二代の而脚色

中門院孫町口

よ守りありく漏削と清流れに決の再後有りと
也れ神傳の傳ハニ至るの西院うつりの日是うけり時も
ぬれもすこしとある人を重んじて御ひぬ爲りと存生
の今御り也御りまと青毛りしふるの神傳の内
かふとくと傳ん人へまうととふくらゆと筋も見え
ぬさんりのゆでと後乃あらひと志りとけ仰へ爲た

245 そしとうふかく ゆくわ

和歌枕を左の用意



一秋す涼風すづく小袖で女ゆきゆきす
とま風流跡河原に
死しゆすまむるのすとひふか知の人こととゆ
きくしてひなにうきし又聞ゆえひりとむじくやく
るゆハ志す ひにばくゆゆめとおゆゆゆる

二東風の西流御足のくきとまむとよ豆

三ふかくゆくくの西流御足のくきとよ豆

あらうか知ゆうゆえくきとよ豆

くては先づノースチラムと呼ぶ事にて竹林をも
たうすがアカシカトウしておゆでチラムハ西洋住むのち
ヨリいつれどもかけてハヨロクタリナリテヘリハ
初学の人へ先づ教字をも讀ことといふくして二番字も
よし教入りハヨロク讀字より入たもたるハ教字を復
多々言ふに内シテ安シマシケル事ハ無事ハ無教字
先の豆形にて此先後とつて書く所をもあつて是
さてお字のうちに又先後約りて教字の豆下に複数の

次第有モ起右左中止する

一系譜アキタモジルモノタリシヤニナシの久吉
アツイ物々の道ニテキタモアリスルモノハ教字其
功きくも人との教の間アレハ清濁のあらわきを以
竹子といふを也シヒタリ豆

瓦素續ハ古代集ナシモ吟声清濁古實ホウリ
ナシムほき仲根也源氏物語城門寺ナシ瓦
は瓦有利本喜也モアリモニテニアホリ木屋也モナ
モクモ兼ね作相方明影教大や瓦室の素

續文集卷之六
時事抄有
文乃有

玄初

一六アホ傳後

兼三法師ノ叶口決

次

一トニヒハ傳後

てニヒハ傳後二匠者

六

一三アホ傳後

詠安大藏
未末記

秀吉御大藏

百人一首

次

一家三代集傳後

子哉集
俊威集

彰勲稿 宗遠稿

是之二葉家父子孫三代集

美ニ彰古今集初紙

原氏御傳 祕決傳後

一三代集

古今集 三多三本

後撰集 己上三代集

吳ニ仲傳御傳 口決傳後

八言詩神源

左京家傳便之治中ノ右司主事守道行也
拵ハ一之御内閣書院御用事あり次第右侍方ニ

御古の内文

一先歌と清んと京人ハ御古右門を威範り乞ひま
道古りてきと御古にんむの是先と御歌と承てゆる
要之御附と家の二事及三事にあはば一流正流と傳
えく傳授系一と人の度ニ附り承ひまし
取路より入る小路と殊の如き此を御古の御
平生の用と云和歌ハ絆代より傳え日暮に至る
歌ハ其城の基にて、徳の作化を納申されまじ

ち爲も是にんとくらうは不可と儀のほり候がさう
世経とくらうひしと四へくは事ふれど大
事へ

要請やくいねのす

一被ゆきしには先づ御めり御行裏とまへ勅を
ハ越向もあくし勤めりかくを放きゆき
かくしてさるを心細ひゆきとてうきはるの
すまへまをきたうへてうたむじ十二へ

是肺にうみやすにて後稿のあくとゆるふじやま
くはゆかもせきか調はうじにらとあくつきはれそ
うゆの風情こづへくいやまたくこゆきかは
えんにやうへくものとぞ入ればうゆにまふるる
風情とくらへてはに被ふとつきて候たる年
生西亞にゆまとちぬにても、おほきくもあくら
きのへ室あひるをうき割竹すうひのうき
文うきうきをうきて候る

影意珠心錄

一影とくううゆはひが先て縮影とほりもはまくは
此影のんとくもあがくも縮ひ。影は縮影又は
不縮影を縮影とへ當るに於けるを紅葉交合が
といつてやうの影と實物の影と是と云ひ
たうから後の影を紅葉にあらじもしもいあこま
不縮影とばくはあせたりとよひのうはま
するの日又七夕縮まうねのんとくもにじねむ

んゆくもひまし又影小虚字實字とひまくひま
そくも有あすとまし。先虛字とひまくもひま字
にひまくもひまつて。ひまく月あてまくもひま
の真こ向のとま字月あまかのまくもひま虛字
そくもひま字月ひまくもひま月のとまてひま
又實字とひま虚字縮影とひまくもひま字
も意とひま字もひまに捨め。縮影とひま字縮影
まくもひま字もひま字もひま字

ウニシルモ御室主と云、虚室主の意地や草
有大隊のわざを身に附き是れは汝と云ふ

片影経歌と云ふ

一曲歌を身に着けたりと云ふ事もよほ
くはるを身に着けたり片影と云ふ是れ物事方
う事とちやめ一つばかりのやせとて云ふ事
のものかとぞしふへきやうりと云ふ片影と

拂ひきる影と云ふ事なりと云ふ事

なれど月が當すと當瓶の紅と身すて當瓶に

火の身の血瓶と身瓶と身瓶と身瓶と身瓶

まくらと枕の綿の綿と身瓶と身瓶と身瓶

月が当すと身瓶と身瓶と身瓶と身瓶と身瓶

十日と身瓶と身瓶と身瓶と身瓶と身瓶

にこまつたわけた身と身と身と身と身

片影経歌と云ふ

片影経歌と云ふ

一五回四月五日から同宿となり又歌のあつてお
と歌してくつさるをやうにひらめく又おひあすけに
一月と奥まで行ふ歌の事あつたるととやう尾
三十六首をすまにうりぬかれてゐるやうである
歌の歌の行ふる歌の歌の歌の歌の歌の歌の歌
歌を讀むの歌と讀み歌ソリカタナガニシキ
キハシムカタマリト云々

二三の歌と二三

一文書ん所若と少す有掛の活石葉集もはせた
すら所若と少す有掛の活石葉集もはせた
やゆづるの音をこ早急に音符もりくわく
のじじあく船入文字の数を算するの竹刀の船
の船入文字の数を算するの竹刀の船
初めの人考ふるまくら体はくらうと船を是共船
がれるよし室家てあはくらうの船を船をだらうと
紫はよにとことく櫻草一古文も祝あふ禮

やの意味をうかとひ中へ幼少の情態を及ばず
おの身

本放の説と多くは重

一毛根本流とある是ハ幼年の人にて及ばず(章)
本放と云ふと云ひ却う難とゆる(宣露傳)本放
大概小く、べくもあします(本放)と云ひ置かれる
う書体ゆうゆうとどうづかの(本放)の御書
せりとす(本放)とよきにそんにせりとねむる
鴻う余り取とて思ふとよけり出とてめにまの
よと門一とゆうと詞とよけり思ふとよけり出と
ふよ(本放)と本放と温じて能道と云ひ武井春
秋と志難とゆり志難と甲子にゆり式ノ詞とよ
ふとゆりぬ有ふんとやうと詞とよけりに清かに
有清きうほりんと直に変化承く(本放)大や胡と
とくふ玉セキセ七十匁の内とくまハ一句式三三字
立ヘテ此也詠被大放の拂事也(ありあハ大放)

勿念勿念勿念
因君之言既終とハ古事記謂
おとづれの事ありハ、江總也、源氏物語或作代
多ホの事無事れやうと云ふ事は、是不思考
直の物もとぞ、もとふくらむ事無事及ばず大むし
るの事に考へ一仰うる

賜善乃教之事

一賜善の教と人のまじめ事あつたる事
之をもとづきあらうて教のめぐらかくと
子教と云うて、其續あるかへと云ふ事
かとくのあ賜善と云々大や賜善が人のまじ
め事と云ふ事の續のよきやうちの事と云ふ事
を大抵えんぢこくひだるゆのきくへとゆる事
い能りてふと一ことにかくせは定まし、あひ方代葉
傳の傳源氏の傳うとせゆくと云ふ事と云ふ事
やうと一仰うる事

教之事の解事

一紙歌はすまへ一文李唐はゆるの筆行はす東北
達は風神ありと李先秀歌短奇 旋經前
也 亂詩あ 混華歌 四文歌 唐歌等
とて極くの歌と云はれ歌とのうへ但一二字のか
口音下して称せよ言ひとめにあはれあはれをも
大じ称えまさらかお詮みうへどうりに口音を
ちきゆとすへ

六義と云ふ

一魚古の詩と六絃をとるの絶うへばえらひ
も又うらやめに美と、風賦比興雅頌の六つあり
世故古今の序小書之油溶一念よりはく其事序
と考へてそけちめゆつむとくとくとくとくと
詩ハモ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌
同浦音ふあはけはうはうはうはうはうはうはうは
歌ハモ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌ハ歌

一號三十神乃辛神也少之十神也
一女神二神也三直神四領神也写忌
六高情七器量八凶與九祀神十西方
忌情與義也史記云此之謂也
此之謂也

奥義也小祿との記小角又三ウル
十神三十神也行少之十
十神三十神也行少之十

一述玄神外以玄神與宣神二長高神
外高山神
明物哀神不明神立羅神
澄海神

三有心神

理世神 指民神

四聚神

竹石直神

五聚神

六事神

年事

七濃神

八凶神

色神

校君神

写古神

六面神

外一興神

七濃神

八凶神

九有部神

十拉鬼神

外強力神

是之十神

辛神也少之

統被名號也由來之十神也少之

十神也少之

讀元也少之

名號也少之

けちめへりへうれし也少之

合掌也少之

風神

かあつとのかしはあつまえたる而ての間猶豫く讀む
す後で功業のきの候も、前と脚小を押さへてま
よしにまわすと仰てはゆ下る。亦之辭也。すら
後多の流の時代よりはえたり被御代おほくおこり
仰りふる所の故人とやうと三脚の被御事細ち
御被御者を教給にまえゆく

主一 玄友八角堂へ大至る。二脚矢へやく

三脚旗へえんにやすくとけり。小部人常にひきく

主に當時急難のあひの間あくまことにありなま
るうべ

四脚八脚きつて

一和歌へすいとくの有とくの有とくの有 演歌式
表様式 孫詮式等此すい続歌と云ふ

清浦奥傳也にあきらめたりと被御事の四脚 表様式
七脚 演歌式 八脚 演歌式 各自演事と考へ
四脚 一序脚す 三風脚す 三演脚す 四

病心子七病

一政尾

二陶尾

三腰尾四

癱子土也風六亨顏七病方

望

八子一罔人二乱思三桐蝶四清鷗

五花燭六老祖七中飽八後悔

豆

かくの二ノ病三光庭のゆきと貴代ハ辛政辛尾

四人病の二様ホニトナリサセラサセハ衣故多事の病

大納言公往舊奥義抄

三ノ病亦二種の病承顏

麻顏細顏又ハ盃狀七病雜狀十病

秋歌八宗又ト病く風氣抄小紀承多歌と皆跡を
のとつてハ情一物く歌歌と之多く之れ
て六曲歌集をよみうる毎一月下先大もとと歌歌
たとゆう名前を多と仰き一物のうたをつゝ
事つふへやうし浦下句の

兼歌肯難をりす

一葉歌六月次よき歌歌と之多く之れ
はち今の立日うちあに人に歌と歌と歌と歌と

五歌ハ各句一歌ニ背経也。今月即日歌とあく
御ノ御歌。

詠事、詠物の互

一詠ナミハムニ歌ト歌ト以て其別ども云々と謂う
と詠事と云ふ詠事乃紙、春青紙本式等一
墨毛利時ハ村原亦必ず紙砂を用ひ乃様に
かく二つにわざと又壁に寫れと云ふにわざ
ニ五歌乃め中に歌跡書焉にあり其聲細
きに云々名は左のハハに細書、上の字縦半叶と詠
詩中ハ上セ一歌子セ一歌セ一歌ト前につけに以ひと傳
カリ但し墨縫三縫、上のをナセ文字半章に書
ち下テ墨縫縫下横十四文字約一章、其後等
一曲ノ歌一ツノ歌二首及三四首も可詠、一首是
差出紙ハ高麗紙也、と云ふ傳之紙也
丁寧たんじんうとくされそ、つる有て三事歌入歌
不叶とき、次入歌ママをうんとおふまニ二首七首

身着する者をまゝ人跡附とまゐる時、堂上高門
の門の角に

歌に放二音うつて、紙を一紙
歌二つうつ、歌二音うつて、一枚に三音有す
ゆくうつたまくうつ、紙もさううつて紙中乃
うつとお濃紙式ねあさ紙あさうつてほむて
白紙乃うきうきよ文書あ紙中あとおへ
す下に名と書て紙中放教多キは筆と紙と絞
も総とて小川と緒とて、紙に放教起之

身着に紙被着二つにわく又たてに寫にわく
わめの中一聲のわ目の中、歌と名と上のまと
うき二のわめの中一放一そ疎三切うく茎ハニ
ツモニ刈茎つとの面に墨とくりとあうれ
か放河を身三のわめの間へぐく大例也此題
りうくハ裏の初わ一歌をちく新のとく傳
へ表の歌ニ音ハらえ表の歌をちく歌を
ちくま浮ニ放ラクレニ放ハうく西で
うく

歌	名	上
一	二	三
四	五	六
七	八	九
十	十一	十二

上流の紙物

上名

宣傳紙或は紙も詰めと匂みにて
下とせがわく上さへ引ひ下又ハ上の字
体不キシモ詰めとくにて名紙を有不處で
疊紙トミ人鳥と云ひづこを書上包ハシノ
上紙上の字ナリ

上紙上の字ナリ

亦上包ニ詰原とかくまが附入ヒテと見方レバ
て其更ニシムハ上やソシモと書ヒテ事アリ此モ
上包ニシマト云フ通例モ圓詰ナシても青箱シモ

亦詩文臺にも上包ニシマト書ナシハ紙物の詰

りの圓詰も上包ナシハ紛レバ一中と書ヒテ

うちにも小やか書ヒテうつりタキシムトナリ内人の

御茶湯難いれ在ニ

幅紙詰原八事

一首幅紙及二毛三毛等

詰原文中幅紙詰原

一様紙、小寫紙又一裏紙ハ本色紙原も出
セの候事ハ前事也、本式の前事也、本色紙原のたゞ
事に用ひ原キ紙には生原の色紙を

前事也

墨すのと紙ハ本色紙原

先写信紙總ハ一そ格紙ハ九十九二と云ひて書
墨絶三つ、筆以當與記之ハ一佐久間の書家作
りと云。天子親王所要大長納とて代々
卓人其後者うつめ有るゝと云ふあり。卓人の
信紙ハ法とて工字卓人の今やりとて信紙
月日の久別有先晴のとて六角あらと云。
前代と云七夕と云月と重陽と云方卓人より信
入のと云紙のとて神うちを有のと云。用紙
晴のとて一晴のと云の時、去はるは秋に至
し當時の時にすくとち歌の文字のふかく至
あは奥ニ若者。日治のと云と、毎月のとて立たるとの
立こ此時、まがいのふ歌、ひく歌、在奥ニ若アリ
細信紙のわゆ、がんじまふれ、一奥ニ若アリ。作の陽
と指の本計りけりかくあらぬと又指の本うちの字
うじ下の方ハ三字ハうちの字にて云ひめ三文字、方紫
か若ゆく由支古法、亦二そニ首せ信紙ハモード

只詠二首歌紙と引合ひて次に右葉浦青の歌紙
どう歌紙ハセセセセセセセセセセセセセセ
同歌二首七首の歌紙三枚に多く上へ紙
三枚下へ紙三枚が二色ハ七首の歌紙二首の
附上へ紙三首次へ紙三首二十首及十首ハ三枚
已上へ書紙二首歌紙以下は紙と歌紙とあわす
一手中の歌紙志をあわすハ一首歌紙歌紙
一くたりセ一くたりセ一くたりセ一くたり
セ一くたりセ一くたりセ一くたりセ一くたり

たりうへし奥山歌記二首歌紙とめは上等但し
一首歌紙三首二首三首少しだと一書ハせんま
歌紙とあわせ書にかく其の名古歌紙の歌紙
モーに紙とく別名とあるとあらむ)

懐紙之湯

門月第一手懐紙

模乃め折三手カナテナリ

男懐紙晴々會便

上	は乃方西半叶アケテナ
春	春日詠言方度音
五	和歌
四	名
三	九
二	十
一	十一
九	十二
八	十三
七	十四
六	十五
五	十六
四	十七
三	十八
二	十九
一	二十
九	廿一

墨井井井
九つすわ

福浦喜月
娘被

墨井井井井
のとくらはれ
めハメルモウル
只吉日何日ト
不二子貞異文
ウト吉とよ遠
計

上	は乃方西半叶アケテナ
春	春日詠言方度音
五	和歌
四	名
三	九
二	十
一	十一
九	十二
八	十三
七	十四
六	十五
五	十六
四	十七
三	十八
二	十九
一	二十
九	廿一

右一子懐紙の總称

二子懐紙

詠二子懐紙名

歌

詠二子懐紙名

歌

七	七
七	七
七	七
七	七
七	七

三子懐紙

詠三子懐紙名

歌

歌

歌

歌

二	二
二	二
二	二
二	二
二	二

セモ賃紙 但ニ一枚ニ便

上のうき紙二枚

下の紙二枚

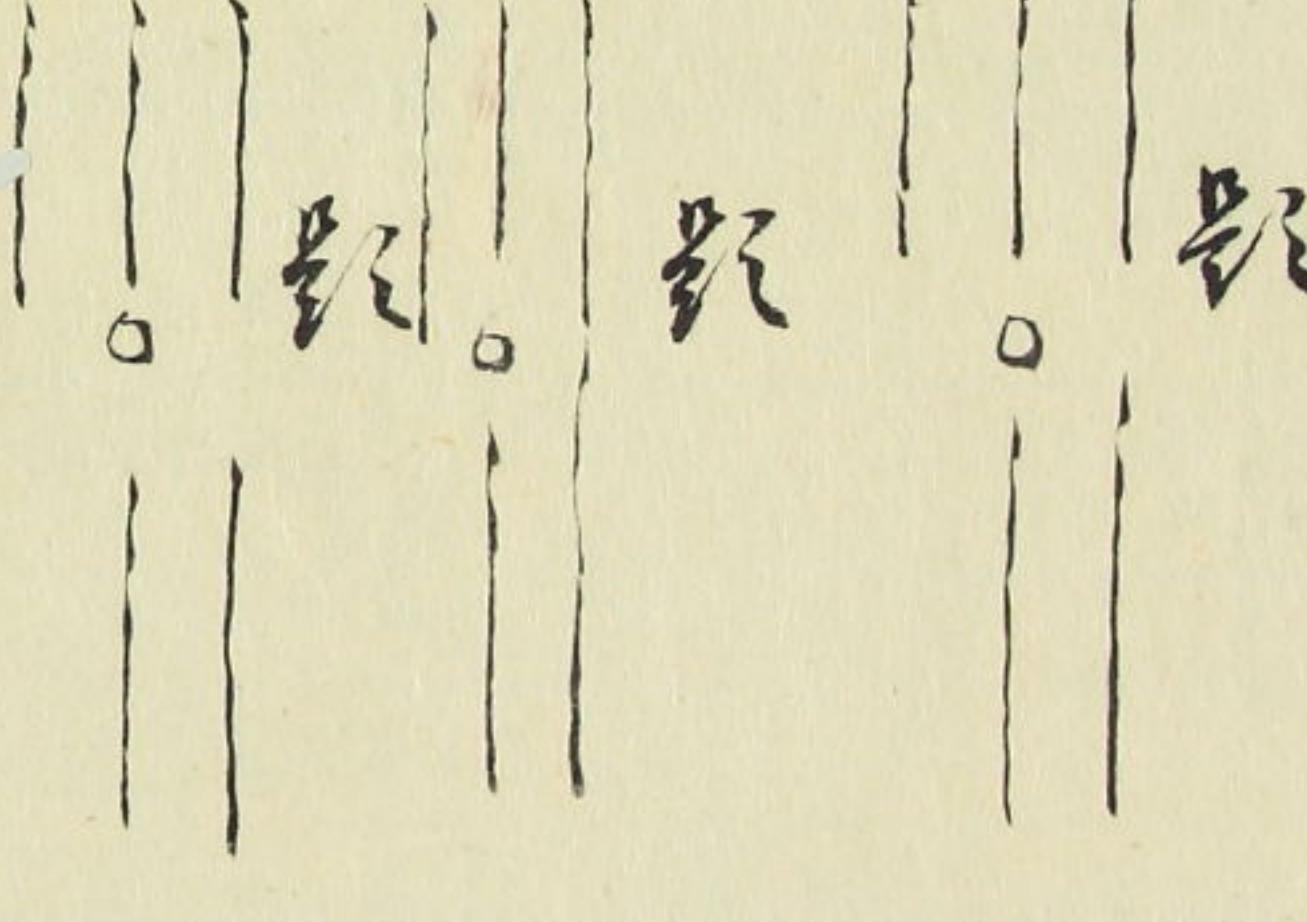
袖口首和被

名

紙

名

○スミツギ



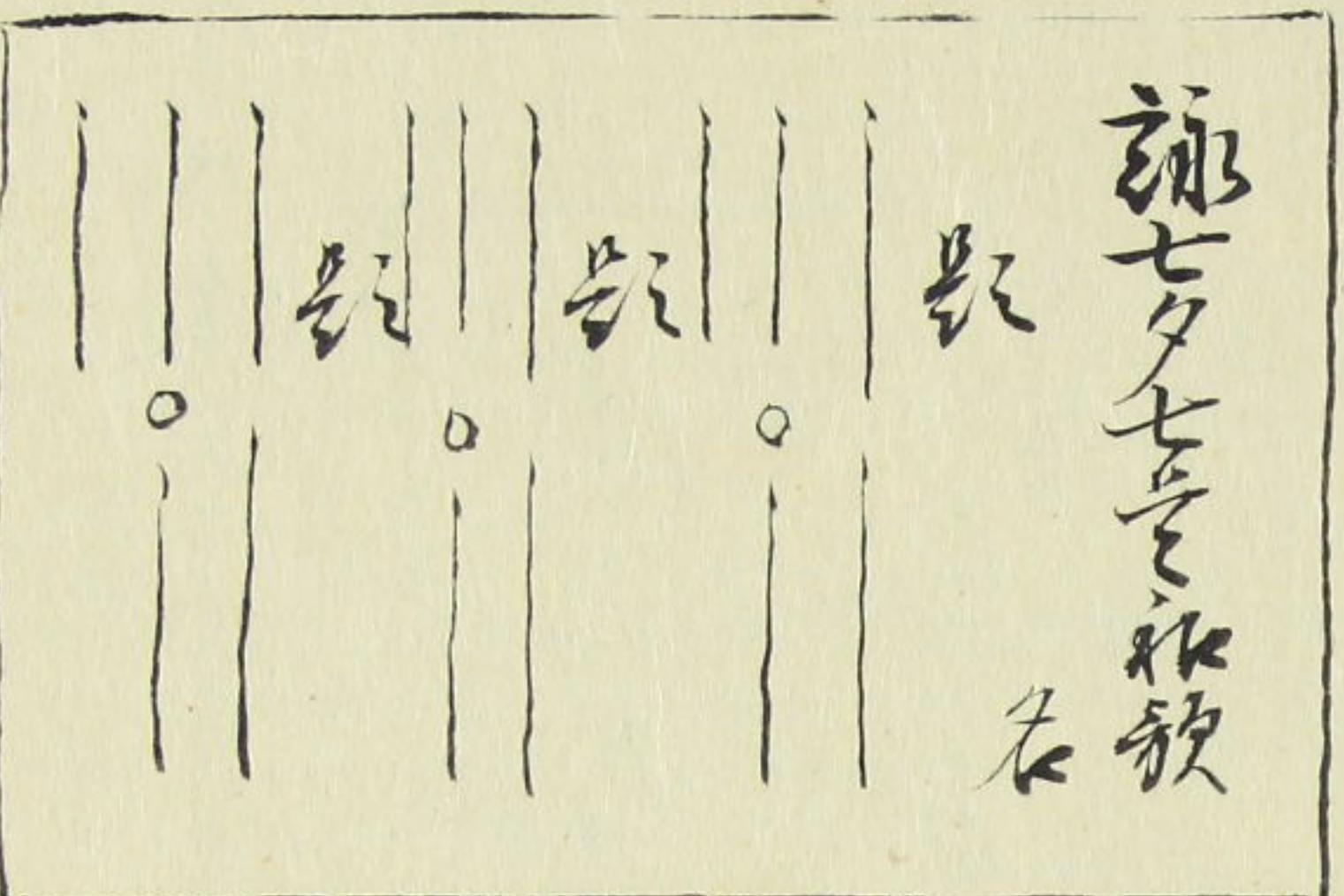
七手賃紙二枚

上紙二枚

袖口首和被

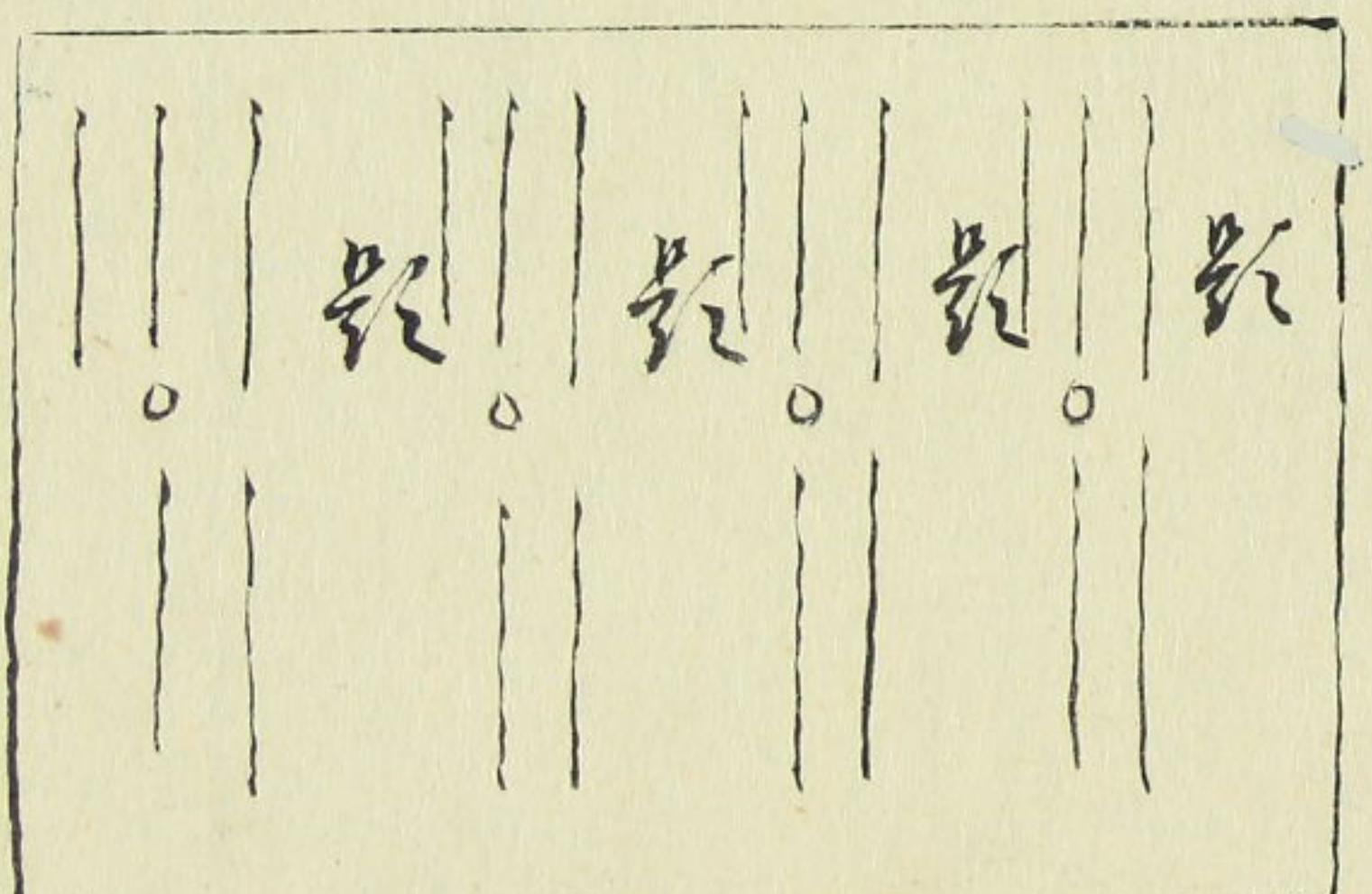
名

紙
紙
紙
紙
紙
紙



下之紙四枚

紙
紙
紙
紙
紙
紙



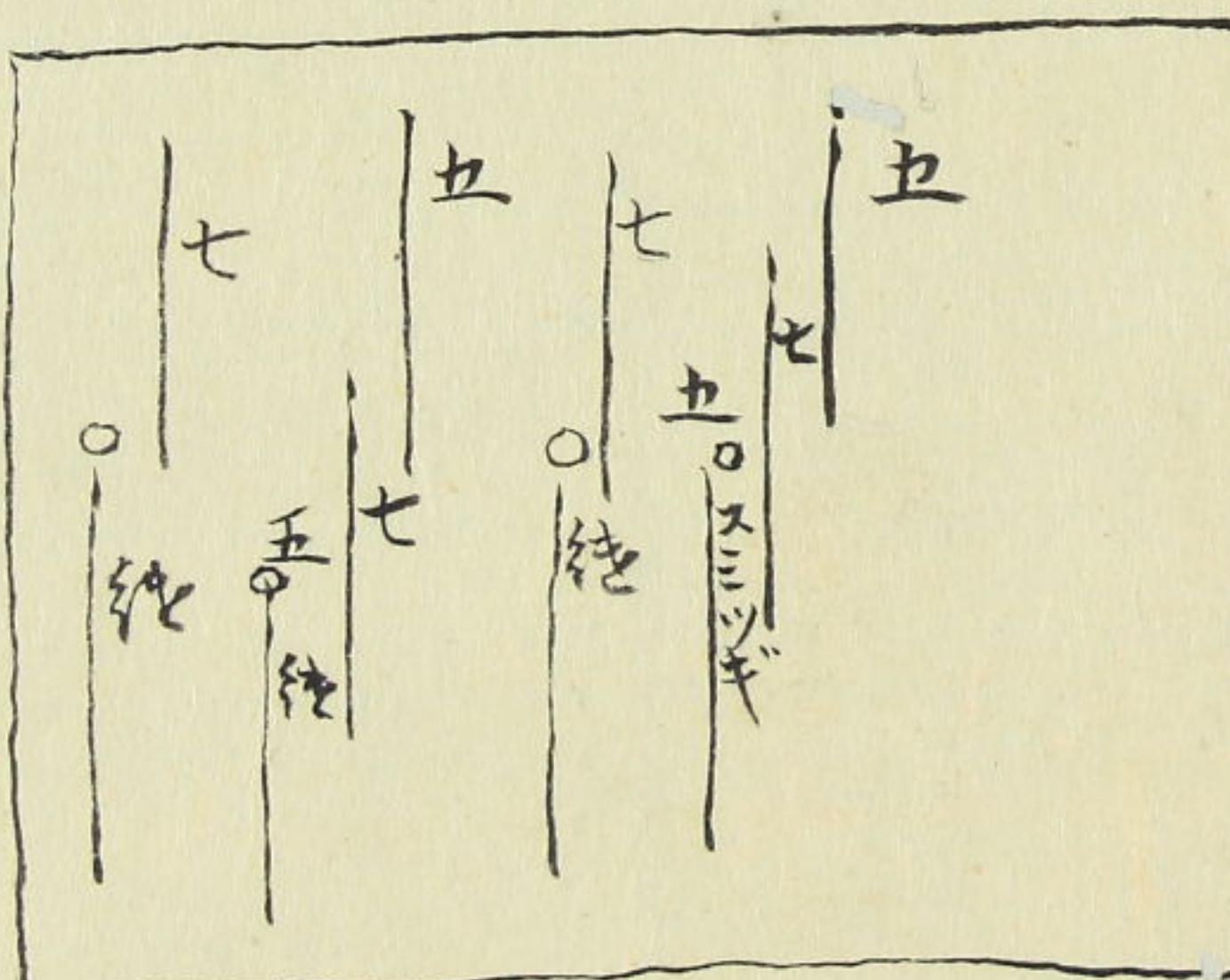
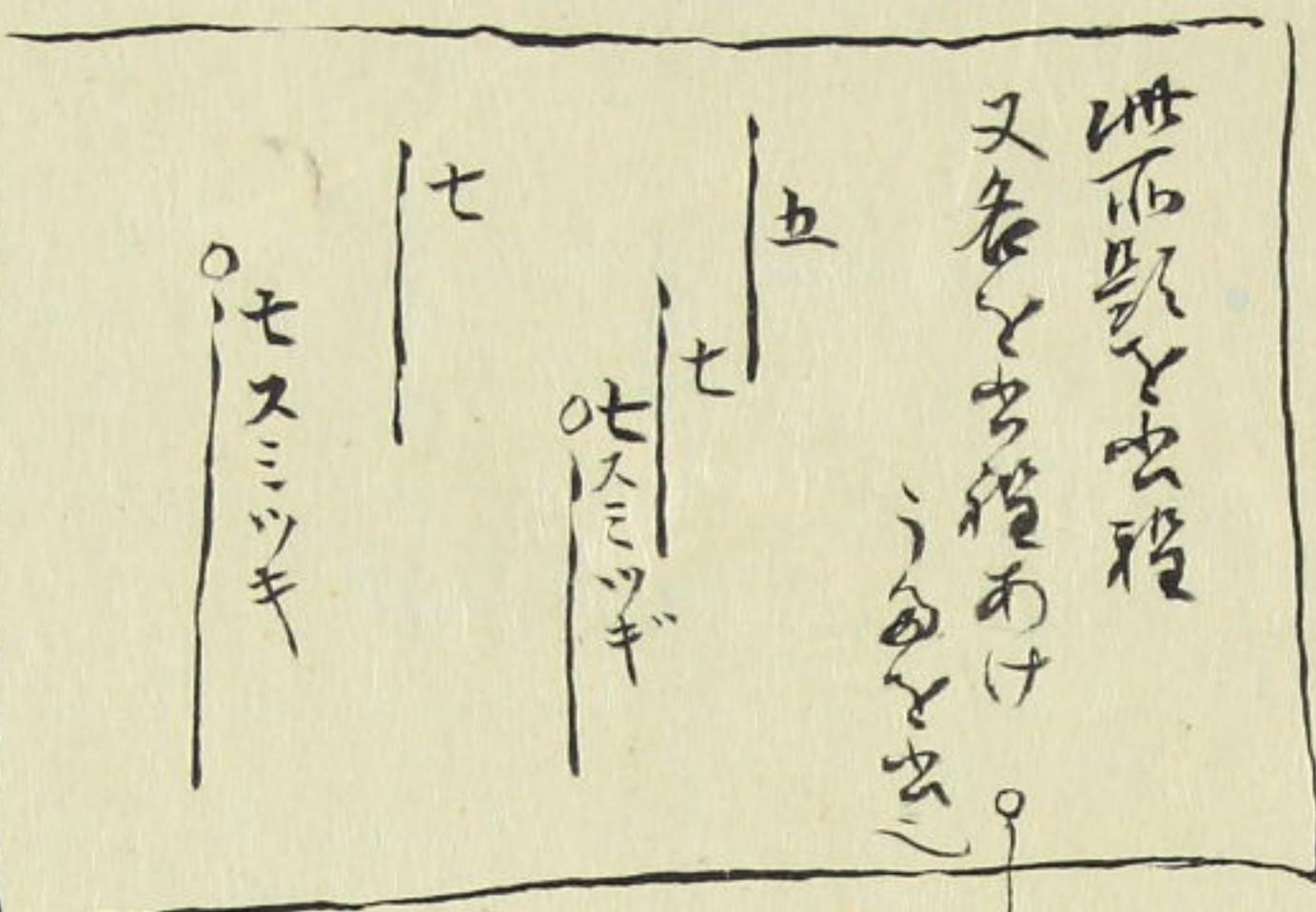
は一紙り行紙や、わめひつを一手賃紙二枚
裏紙。市とひく初之

十支帳紙ハ紙三枚に切つて上段一枚に二支と七支
帳紙の上段を四枚二枚が写真見もさす帳紙下の紙
四枚三枚め三支但し奥跡にさすめは紙見紙過
十三支六枚所と申す

十六支八枚所と申すの事月日あると申すの事
十六支八枚所と申すの如く

女中帳紙總序

一章六百一



一章二章と申す者ノ如クいはれども此後はうるる
裏で別小紙ヲ以て其表の名而行ふ者有之也これ
れつまこ

經尺視儀之手

一經尺に秋とがくに古被のうの被女のが視儀もく
ううう一先とうれどもうふ二引に古被に上り
包みからまと下はくからまと下はく字下り
てゆる下の書本式もうち書きをあく名を
あく名を思ふこのくの被とまよ、上下とどうらま
ゆくくく一是きやうのひま名とくゆくゆく
キテモトドケルノ名付あくまく一女の經尺ハ
よるのうらを古被とゆかくに下のうのうらを一等
はきくう等下し上からまよと下はくの経尺様也はむ
一けく景尺ハ三引三引古被のうの被女のが
もうううまし 美心奥紀之
追悼を志にあたまう經尺様が主體にして視
いととうめでやにのうもすうめん好んで算す
用ゆ一役の時年生のうとよやうとよやう
一經尺手人で用ひる墨紙の墨をひとえに幅金筆

已ト一才八分六厘半セハニニ才無用ノシテ取リ
一才五分半才人の短尺と云ふと云ふ事もはと
竹のちにて短尺に添入すを助すことを行ひ短尺の
夥い草人等の内に被と云ハ御子千人小豆角の
古物株式ハアをうちの水をぬらす中に草人を取
除く事と不法を行つて居まゝ物の模小
おに小添入の者と正糸紙にうるゝ内装と書く可
柳子の多いきよはばかりとまく添入助す入すは
短尺小高さの被と云ハ被を以てアサヒ多糸紙の等
短尺最底がく總称有光短尺等と云ふ事も
めの名ふれどくせんとくに短尺又云被尺等なけ
と云けて之れ又良れわの方被尺も一中また何等
去一二三等の類ハ甚るふら金うちと云ふ事
名の類ハうねりとくとくが二筋にあらかくして
短尺の上等本質と云ふ事と萬々緘の有るわ
みの本質の有る穴をあらかじめとてある事
一筋の本質の有る事とて短尺に思ふ事以上の大體

とくに正しくて古文書もよく經る所
ハ細字にてよしむにすきかの詞也、とい
さくせつらるもの仰る、大やくかの詞なりと
まく小う紙書くをよしむ詞として有り

經文認核之考

四字	七	七	五
三字	七	七	五

平人の經文の讀み方
せせとのわから下はりのう
らすてで書上トのうとも
一まつはのわめ(字ゆすらきと
はり)

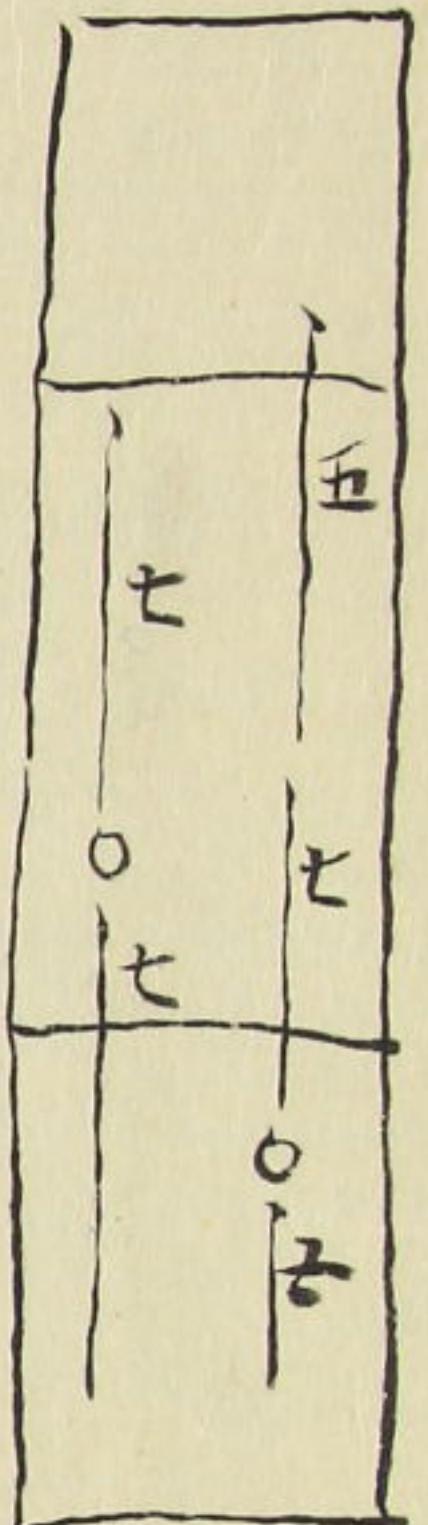
かくニシテニシテのものに経
下のわめうりちニシテおが一去
てのわめ一そいにまたハモキタヒ
てキテ、又写まうり下りき下ハモ
シくモシテ西下のものに経
下の字して看まどかして年
竟經文の面見至一きやのふ
はり

古文認核

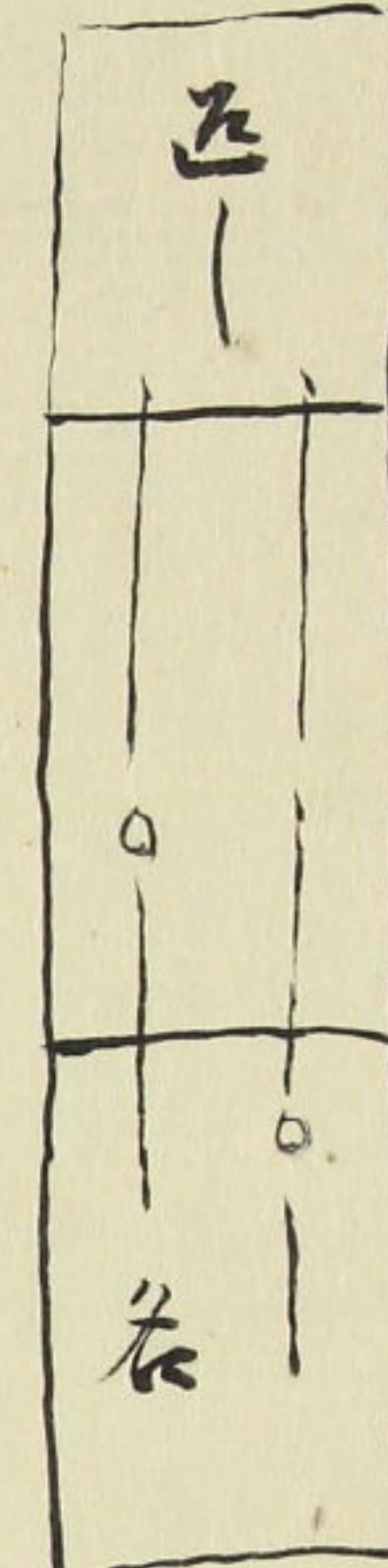
四字	五	七	五
三字	七	七	五

は經典の認也ハ古文の讀也古文
に字ゆくかく下のう上内々に一まづけと出
て経りハまに口

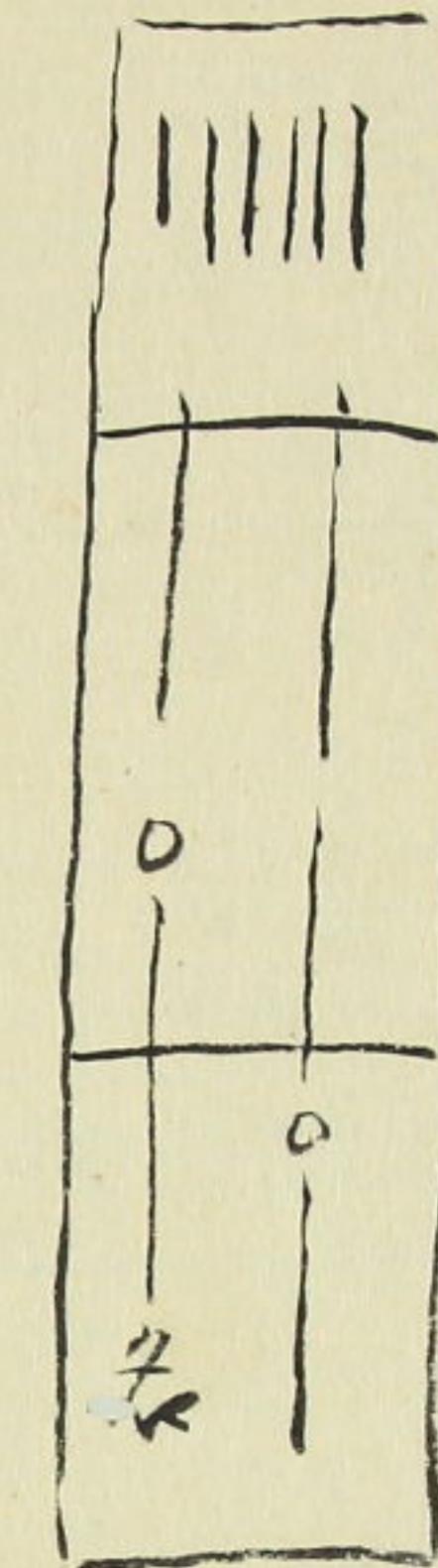
女越尺規紙



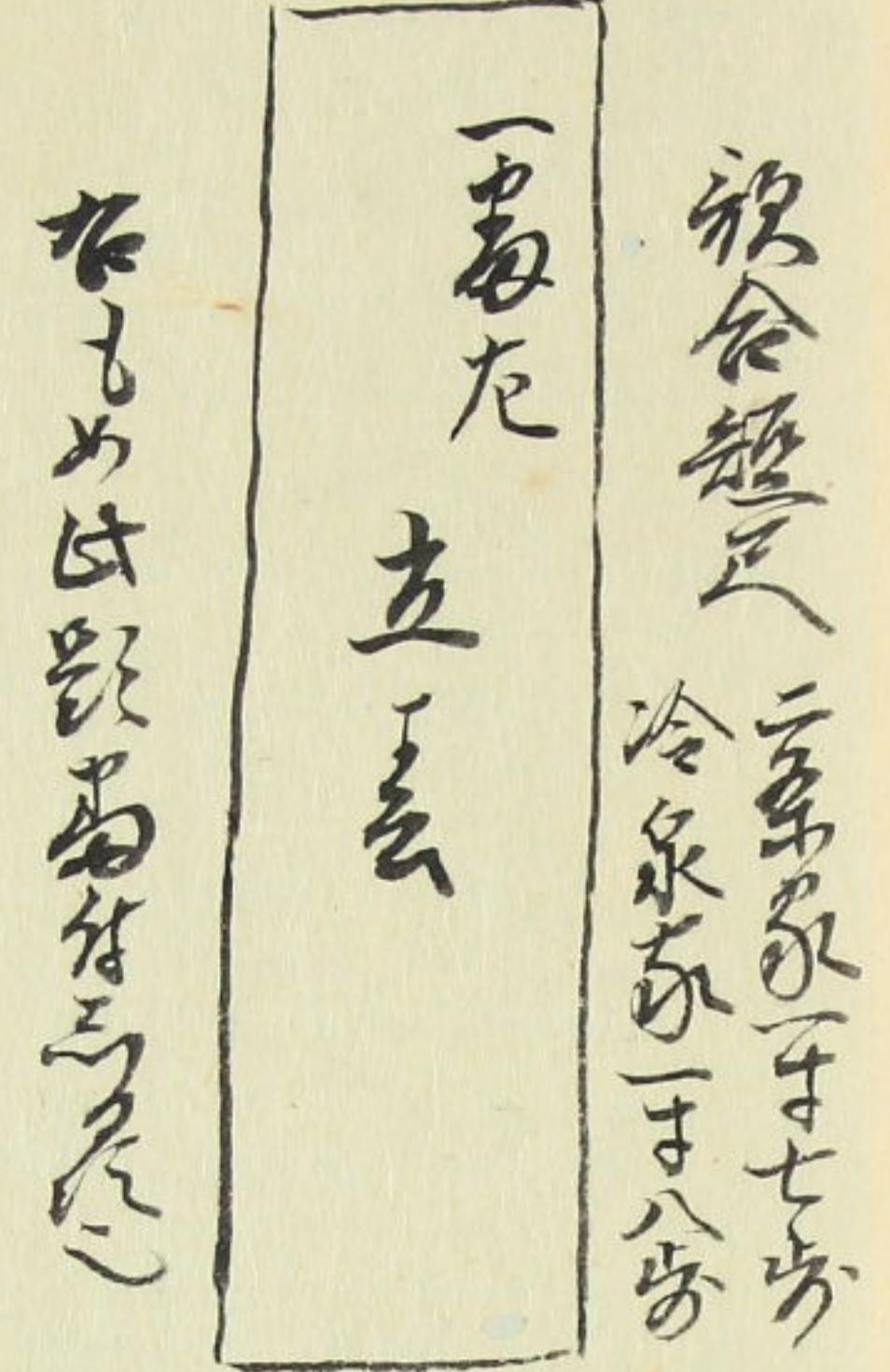
女の越尺のとく古尺とゆすに
下の匁一字下けいは承り上の方に
字とくけくわむれむるこ
せまくまへ墨のとく承り下
を承へりこ名へ承を小紙を裏て
ねあうり下にゆる



賄善欣ノ一物の越尺規



詞丈、祝め初一詞丈も越尺
ひきさねて二三の祝く有
一物の事候かりゆゆ可



祝食鑑定 三系承まセウ
冷泉あま八安 祝食為好ホトモ直手に重手を良
一萬九立玉

女越尺規紙 三系承まセウ
祝食鑑定 三系承まセウ
冷泉あま八安 祝食為好ホトモ直手に重手を良
一萬九立玉
女越尺規紙 三系承まセウ
祝食鑑定 三系承まセウ
冷泉あま八安 祝食為好ホトモ直手に重手を良
一萬九立玉

絵書 説

一絵書きあたしめやう文の長短にうち縦横を多くと
書へて大やくまゝ矢引へて筋あらと奥へてせふ
中にても入りて大極被は奥ふかく下部ハ一筋三
筋四筋五筋四二四筋四二とかく至る外乃法
文八九筋、いふとくは一筋にひがつばかりへ
一絵書きあつてもうハ吉田源氏が絵かとゆうて書く
今ハきどりのことと絵と用うと云ふものと紙川と云
はずれの三紙ニ

小意ととよ色例の小意紙とおうひ

タレ浦二枚重と文ふかく、ノア紙ハ財ふつて絵
ゆる稀重御のれ室こけりとすむ室松室かと稱
そわくのまね絵と此後は森庵が手写草紙を教織ぬ
深物の所不有異と

一もの枝りとふねつうとすむ室松葉のまねハ足ふ達くまつて
にあらひのゑふとすむ室松葉のまねハ足ふ達くまつて
あらゆる等々多きより

吳本云

此卷末に鶴と他よりいはれて鶴と題する

後編は鶴と詩にてわくあれとか堅房庵ふるわ
て下の方と肉（れん）入るこ鶴と乃と下はげゆ
てよどと上、匂きく経しゆるこ又急経式の書
用紙の裏紙やうじて鶴と竹時を竹と
枝のうち（ねめ）あらひの葉葉葉葉の紙とせきて
鶴と（ちのき）とくとく枝の根根根根根根根
に用ひいはれを下の役にゆひり

一葉（や）をかすむハ湖濱小鶴と白紙つとにほくう
くみの鷺にテの枝を伏りて（ひそむけたる）ふく
かとのあらひ紙城（きしろ）と麻紙（ましろ）と
唐物（からもの）の鶴の（とくに）だすかの葉の放（はな）めと
その放（はな）めの（とくに）だすかの葉の放（はな）めと
その放（はな）めの（とくに）だすかの葉の放（はな）めと
今玉堂上にハモ古實（こじき）とおも用ひらまと

古代經文新あら海湯をもる用
古代經文新あら海湯をもる用大田近瀬
初り山茅と

一族大作のあわ室ゆきまへと絵写屋のねむし
せ小毛板ととに被拂ひいと拂いにすれりと拂
の盤船とお詫有不用之不候の流

被食の事

一茶食とす夏石宋代に連なる竹生と古今
集ゆう本草子院城山代乃山城始とくと萬葉
とうふの豆乳を多めにばらやくしゆ

竹生

被食の事とす殊命の被とする爲の豆乳
む判若別くて汗かぬあるい是代の被食
を考へて左右のすくたの被と誰除する
えすにても何れかの被とする爲の被食と
被と呼ぶたるがと食せし馬鹿御主もいた
もとをす角也是地三の被食の是被食と

さく方にハ序をなにかあり先立のとく方
右の方人左の方は左側に左の席上の半身に文
豪体を體とすてて座一而時小脇肩疎せ
たる者薄仰有たの薄仰ハ利左の右の脇ふ矢
左の袖を起して左の袖と詠より左の袖仰利
者ハ左の脚に文巻と左の袖と詠ゆれ
左の本経の中央と左の袖と左の袖と左の袖と左の
袖仰文巻一とく左の袖仰文巻、詠と
左の袖と左の袖仰右の袖仰文巻、詠と
常の經の袖仰うるる
各筋筋筋筋と左の袖と左の袖仰
左の袖と左の袖仰利左の袖仰
二ん利左とい五右肘巻と左の袖と左の袖と左の
利左思ひ立と腰巻と左の袖と左の袖と左の袖と左の
袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖
左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖
左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖と左の袖

若者一勝原書は多度は極筆と文を有す
と云々すゝも有毛利若山入力達將軍の
へつてとがまくに変形之

欣合實事と更りては更ゆるをいふ所のた
くを有すとんすうり高純とく直見とくやうです
アリ古にわたりて是が技術の面白つまることを度
こと竹山とく

欣合に欣合とくのむかと古い竹山とくえだ

此は本代の毛かと御測定と仰りをくとくとく
ちむの物とよきにあひて是れをくとくからず
まし

亦欣合とくのむかと古い竹山とくえだ
型を有す欣合 それがあまのやくせとゆう又は其の極度を
測定と仰り毛かと御測定と仰りをくとくとく
うち角を欣合とくのむかと古い竹山とくえだ

屏風の絵の変

一屏風の絵の歴歟更に古今に見えて多くは
紫月の如きにゆけり 女入内門の屏風の絵が歴
跡而位の時大嘗會がこありて時移の屏風
石原山の如き亦、此の如きと毛利ふやま絵が多
ハ良家の西屏風の西月より三月までの事跡
と云ふすくい小物と有りて、大嘗會の屏風の絵
と曰ふすくい小物と有りて、大嘗會の屏風の絵
と曰ふすくい小物と有りて、大嘗會の屏風の絵
古今の精集と有りて、
大嘗會の歴歟
一大嘗會、天子御席位入時あるつゝに於ける事と
手幣役と有りて、内裏、御諸方と有りて、
天地の神靈と有りて、天子御座へて、御坐す
事と有りて、御坐す上りの例と有りて、御坐す
事と有りて、御坐す上りの例と有りて、御坐す

天水也作乃作也とゆうて云々と云ふと云ふ悠元
すとしぢの事と云ふを云ふと云ふがまの農史内裏
の名とすと御と齋の代を身といたすと云ふは
修能と其の妻の廢風と二種の詞と云ふは世間の名
西と画く被と右にとこころと辰と辰と自年令日年入
あ日年入の事とゆうて云ふ事と云ふ事と云ふ事
て云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
端つた事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
是知にて異之

大章金印廢風

并印玉故稱齋故曰此名也

古本の御の御の御

一経費の御ハ前も本末金銀人物山川の表ひて
画きりの御も画に因情とくめうて後へに
大や山川の御の心づきとて秋入等六人物を表

経費の御の度

そく物のむきたる處左一木を申すにてうながす
定なる所と申すにうち内侍もうへておひでを
信納ゆきと申す

かま乃わ故乃支

一嘆の故がうたふとあらゆるに定まるに
公れとすしんの先別もとを事じせよかと
とまくいつてまゆゆく嘆號を落實の聲を口下
乃也下人位階支職にほけの袖をして大中臣

能宣頃后醍醐天皇の御室に侍ふ西源少翁父の鑿

朝臣すくとつるれどとくに能宣に投せやといと

祖主の所にうつて教とよまと 天子の御室ひづ

経(きしやま)と申す者あり不景のきみうりを御室セ

らぬしうりをと申す御室と見えたりと申すいふ聲を

支へぐくと鳴呼のゆきと一木はういと申すよし

(ときより)

人をもてて其の如きの祝をなす事は御法事に似たり
書く事と物とから常入前事にてかく通例と云
ふ事と存候る事にあつてかく如后

三みうけ事

三みうけ事
三みうけ事
三みうけ事
三みうけ事
三みうけ事
三みうけ事

追悼之言をひきかへば此の事

一追悼にひきかへば大々、詞文はおどりとせん(三)
うるは一言(よし)二言(よし)三言(よし)一言(よし)三言(よし)
内歎一言(よし)三言(よし)四言(よし)或文の事に達入するも
有(よし)一言(よし)三言(よし)二言(よし)三言(よし)四言(よし)
上哀傷(あいじやう)事(こと)ニモ(も)うへりうへり動進(どうしん)事(こと)
通(つう)うへりうへり事(こと)三言(よし)三言(よし)三言(よし)
一追悼(ついとう)事(こと)三言(よし)三言(よし)三言(よし)

用給の制有

主な是室

政事あり 仕事

済ふるつむ

シテニシテ油

油より うひよす

かとソス御使事にそひまくあつて おもてて考へて

在内教ひすり頃ふ おもてすと至ニ

死歌勅進之文

一云 そぞせら小進者にとあし人とは進くく被と乞小八
脚あへ窓ひく脚あへりあ歌と乞ひとと詔と紙
小包上紙を乞ひとまへて はまゆる年が生年板とや

か等事と宣方をひ一二三六月をうりと紫ふ勅進以爲一

但か進乃室りと焉りと焉りとおは無、三行ノ内壁居書
あく一物に及ばず 上包内事原以當紀え 亦不經之と不用

て小紙とひとモ越とせあくと御進以爲一
小紙とひと御進以爲一 ゆもあへたよう御入と勅進以爲

一とて死ふかと云進者と云ふと曰ひまつて 但

通歌題又に歌を不出にあひて 通人も歌をひと書

歌と不書との一歌が言道の人也

何葉何十隻

唐有避齡

班若
和進

何月何日切口卯年一月

何葉何十隻
赤身燈明
何月何日切口卯年一月

班若
和進

經之上包紙乃中價者爲此
乞人幼進之之是日事也
小紙之幼進乃總不紙の惣
とを定まつて式の大抵小寫紙
六つ切の事云乃原も用之署
下を八つと切く用ひり

法樂之教之事

一法樂之教也六種名之何方何事之志乃伸小
清乎一年之始也之何事也中無欲日之子也
而其緣日之一事及十事而之之是事也
八種名之也者言之而紙之復二社之而而
皆私佛國不納之思也有之何日隱行德亦何事也
何事也之經之數名度、被とくに缺二物也之言絕三絕經
想之是取教之六種之言之誠うる

奉納乃安時事

一卷納入款とハ仙作に浮く。初附仙作
亦は三端神社名。川内郡。奉納の御事
玉手と十手及石手の三手。又納。此の裏に
きて墨濃紙。有虫式。小鹿皮。二つに折。竹
板も入り。と。紙と。纏と。玉包と。一。者主に
一。角の生漏れ。上紙。油糊。下紙。絹表紙。と。け
た。手毛。うつ。

上除手

百首

信告法木

如切。かき

神社豆納之巻上書認

三部入安時事。安川附入。豆
一三部。六試筆。年肉。年去。都。之
前。入。豆。之。一。二。三。部。有。三。部。と。六。試。筆。威。書
の。豆。二。部。三。部。豆。有。三。部。と。六。試。筆。威。書
の。豆。二。部。三。部。豆。有。三。部。と。六。試。筆。威。書

是と川はとふ

三弟の歎と哀れと嘆にちての名而ハテ御心の名而ハテ御心と嘆
旅かふりく年と延年と嘆かむがまほと嘆の名而ハテ御心と嘆
涙をうてて涙こ

一月既とて夏と秋とに物がたる御物とゆくそれより
浮舟に門人の方とやせうれい附とよと相はり所
紙大すが奉書小寫紙りとくとくとてにわくと
一浦小川も紙也三歳とく三帖ふとちニ西す
二宿なり思はれ一宿とてとく御役ハ御身に付く
アラ善室とし書在三抄上の名ナセ又事抄下の名吉文等一抄 番號
通御年久男經久と御役と仰 跟ハ之初御役内
モーに争く所の歎は汝と姓名を立すとてやくは國字
一て汝すに書はくゆくと三歳とと是に門

序并文 刻書のす

一席と文也初出也初人の筆に於て之り世も
多きうちもめづる事つり序と、撰集物のとく
ゆに書と序とし、亦がまの歎と、式とま紙の和

次方谷大井河野吉野入席かくく上古にぞ例
有りし文忠式、其の物硯香色の紀すとの後と
ちく紀はとし記文也酒書と人に欣よとせ
ほれそほ浦去やうかう行レモ撰集にぞえだ
古代集をか爾研修みよと此手は思多承其

序ハ序の文法有るゆく文ハ文ハ所行ゆき題書
ハ初去の一百四十種とかられハ社主の主ぐまに
一ノノノノノノノノノノノノノノノノノノノノ

序次兼歌組行

一月はの兼歌ハ西月乃初令一年の初にゆく
亦六年あると年中と云ふ地るけん人より出る
も有りゆく是の有ハ古歌影集等之集とな
る三月より二月より春月亦云い
その兼歌と出でて二月より春月亦云い
多ひ兼物の事なり三月より前代山吹煙草
亦名く方々と云ふも名此名ふ准て是を

一
二
三
又
新
月
游
此
組
合
下
三
手
組
游
李
二
手
游
此
組
合
下
三
手
游
李
一
手
游
此
組
合
下
三
手
游
李
一
手
游
此
組
合
下
三
手
游
李

三十首

但こせタ会へ七首歌又二三首も有せしと
計と七首組古法の通りうて
新宿又御手すりとよすとあさぎ
十五日八月廿二年ニ大暑月と二段の令よりね
最も在所の事に不泥式ハまつむのととくの事
のうりにともゆづりもんのナニ夜も伊豫行

此加以組合者為古法乃景山所傳之黑雲之
謂也其組合之事

一宵宿
去の時庶蓋砌蓋に觀く三井の山前にと生家
通わる林を以て此の景と稱されより後第に之
を來りし日中は常に左の一人の者とあれば稱す

第六章 有罪行

まことに組合へたる所まで古法より有り
組合事は必ず用ひる事也
考より組合事は古と云ふ事也
然れど其の事は古の事なり

家ニ堂上トロトモはああひかの様にうき歌と組合ひての舞
ハテナリはるはる大吉組合れし組歌集と本多の本多
と見合とおぼえのこよーく海老歌引方経高きものなほせ
くわくの和歌乃道小あひくかほり天子とすとすれとくらひ
歌とゆきとせあが内勅を下すと歌とはそとまへ
承八年人のもの歌影若にて候す。此歌家能馬舟大弓
曾祖也

お歌たる歌と組合せと用う事方と小組合けに
わち方大やうハナキスル歌と行ふ組合にうるそも
うるそも三首難二キウツム云ふ言肩

歌はりハ初云乃歌毫歌うて云ふ所當云葉か

歌うつて三ツめに四そめ生歌う前ニ音あひ

喜虫歌の表まで後云そめ喜虫のとみ何と云

ぐれ亦喜云歌組もくもくと云三ツ目易云うと

平高うとも見合とて組三音ノ用平高音と

組合とて或云高音と初に引て次モ低音と

地合ハヤのまゝと云ふ所當也

難二音 还情と歌う山家歌以之御歌の歌う

歌中ハ音字のうして伴一歌ふ組歌はんねん

山家草木歌ア蒙地絨乃ねく見合と組合

今之席勧物入事

一云の席うちりは乞布に三枚の四角をうけ、筆記
とぬ、文書紙の前席とて、所居の事、北より一つ
並ひかく前席紙の三種、腰中もる懷紙
とどりかく欣ひからゆ紙前とて文書に重ひさ
神のて猿退毛の事、三猿て木のねら
ともの筆、宗通、列記紙の、絶活寫近人
あく神の方に前からうりきすが後の人殺と詔して
席を主ひ沙門次に律次に達者次法師次に老云
老人あるやまもしくの長者多く沙門に入門の年數充
満と少く至る、老若と不穢席と云ふこと人殺表
わ承（ハ表乃席）とありすめくお望に此の字有し
時、合懷紙を懷中一呪に老若宗通とせ宗通
例のめぐに猿の猿退とて筆の文書を小懷紙と
定めたり方なり一人ツ五合と云ふ事ある

儀御を文書に記述する時には、筆者からて是れ
は神の御前で書かれたものとして括して扇子と稱せ
る。新嘗祭より一写叶ひて是れやむち様紙に書くに
扇と枝垂る様紙に神の御前と稱して是れ
人様人様鷹帽に大紋式の素袍長襦きと
ゆうす有通例ハ扇子と青色のふくろを名前
奉行室と立て文書懐紙次へ写し指て下さ
達の意生が主席の中に
國君とあく農々 村式ニ農三神ニ御前と謂
たり亦勿論三年の御前と謂ひ云々無と不用板
蓋之但一左右のあれ事と長者にす写事ある
若事に若事奉り如例主席中をうにあれと云
ひて是れにまつて背びの事と謂ひて入と云
ふに至くとす文書を主一派と云常坐あれと云
短不思議と想ひ蓋に入れと称出文書の所と云ふ
すかく次に坐と立て様紙や神の御前と書け

のうそ短いと櫻り衣ふにうそを懷中へ情事たゞ紙納
お猿退せぬ五うきの壁に名だるみ人方走うち
一人立古今さかあふ情事の時若志空渺々すまの

天の高今まらふ 情思の時へ
名思せ浦のすの
立身の如く入組て、其の事例を以て
とては御内閣に御蓋を以て次第の所へ下に吹き室観景

御手紙と済る 宮通のまゝに奉り又例へ
一方乃上壁のまゝに取れておひがひのう
御坐ひの處に

古の文通
詠山紙わが時宗也文理と一
九〇

波の壁や人ふ強めと複数うほか
かかへて紙を
紙とたのひにうち
古びぬに抜かれてとく
紙とたのひにゆかれてとく
紙とたのひにうち
波の壁や人ふ強めと複数うほか
かかへて紙を

次々と落書きをしていました

信中より
櫻えり姫とさるも
おゆむひ

此書を詠せうて おもひでる
写し終る後題へ
と詠科へ入るかわいが かしき
是ハ詠題の後題と元々お詠題に
いたる詩志却くはなにか一かうすと云ふ事
此題へと各々詠れを何つともちき居の食事行
りうるにゆきく極まり

丁度小の書道にて卒業したる
不思議な筆跡に卒業する

歌の句
アニズルこ 茶碗を 湖ハ上壁より沿岸に 宝鏡こ豆割と
乞事へ 他へ是れとよく御をしてたゞ今もて乞ふの
人よりまづ有る茶碗にて 月をまた御をしてまづと
もくち渡にかほり はしまで終るやうふが まるハ御こそ草书小

よあとよすにまづくらむ所し人か いはくおつりし又知りへ
ゆくゆかおゆく放りとてぬよくゆくゆくゆく
もうゆかひとて詠りきし まほ小こよのの詠と再考
一絞りあてにそのねむかし 朧モ一まニまリつらひく
も詠りのゆにうるむかはく おの事の意ちんじてまづ

おもひ割湯れど 細て書うほして お行に渡に
おもひ割湯れど 改めしゆく詠ふはくをひ文意の脚と
うけて おもひ割紙ハ末席の人へ虚紙と云ひてゆく

もひくの句文卷の右の端に鉛に付て清風讀懶
文者少く無く接紙と不殊清師にはうか首をうち良
接紙即此卷の三邊すぬやうに文卷に左へ接紙を清師
林立よどり下には接紙の多くあらま接紙の上のみ湯と水
のうちより接紙のもし化の下に湯をかきこみて其を清風

城崎紙の
やはり上うる一枚室とよみ文書のとしてかく
方の、まことに懐紙のうらうらとがまく在のもの、想物とや筋とあく
（文若の下）玉に袖あ逆うの状態第匂ひ大を

毛利一松の歌と詠じ塔他者の名跡ひそに
講演は通じても時代の歌と一自承説吟の因半仰に
詠歌と多くてかんこ次第に講演に临御すあ通りに攻上
讀者欲せりつらをむせびと詠歌は餘りに多西の歌と詠歌
二角之日本文書年譜

湯ノ経り
湯原清ゆ
延喜院
貞承文書
治次め

此詩肯有後先之類乎。文選以載之。莫乃懷紙之
如之何也。但一肯有後先之類乎。文選以載之。莫乃懷紙之

志滿が
御内事あつてのゆ
かへとあらわす

但し短玉へ詰取られぬるの前後は難^ハく見ゆ
とて也自詠^シり合ひ^シま^スるも^シと云ひ人

但し矮丈ハ御歌也か詠の前後泥離事無事
とく也自詠之川今まゝ立あつて之をも人
あるもあひて立つて一トモ
、高木(木見山)山

ゆくにあらへんといひては、只、心をのまふも、この間の心よへ
貴なほとも毛取へ、か過ぎたゞく、毛軸へ、立さうとせば、生のまぐり老く
功をのこすりて、すと毛取毛軸の影と、わふまゆの人形、ひいて
とも、あ過ぎ人功をのこすて、寝こ見れど、こま過ぎて、人をあざむき
一き。うの仰り、近づくあつて、妙し角のえい、我段も高過ぎ人

のとおりにて
福原はあゆに 枝葉紙と透かしを
の手ぬけに化名を有す。卒体に

乃
ノ
リ
シ
ル
門
家
通
三
へ
こ
か
り

但こび縁の時福井守がおもひ立つた
所なり。併せ後日、おもひ立つた

11

云向袖后勝汎此不近のう

一矢をもてお詫び候たゞ未だより六ヶちふ

時時左の腰と右の來達の方へ少く腰帶から腰紙と
取がいかし川の邊を走り其の出港よりうち亦欣
寝立きまゝよかくに毛と情事し都に衣冠を
たる者二筋を遊祚おうち腰につけふせは一

かとに長りて扇と左の方にゆき毛と腰とある
腰と左の左の腰と左の方にゆき毛と腰とある
左の宣情す、うら情すとぞもく宣の前の席物
かくして文書に左の腰をあたふれとく常
障まゆく腰と毛と左の腰退玉の意だ
下に毛と腰と扇と毛と腰納め毛と左の腰
人御すと中腰と毛と人腰の中腰と毛と腰
近づき

一筋の毛並み腰赤ひ京使の時毛腰身被満の
あり古今席 大和歌などある
八音の名前も満腰等) 独家通譜等
の如きの品ある) お通譜等の時、譜例などを教

ゆく

一中廢りゆくとす様を裏ては往々院入る事
はしまりたまう。此の云是れが御廟のよみを
もと例へどりか一ちひそむきをまつし金入へ
ゆくとくもくと寫瑞の印の厚紙ととつけゝうと
手和席ひ筋ひとくを行ひきりとくとく化し
世間云ひ諸多の院へ附せばに無礼ありたり
くはやす活中絵。此の云者も少く活破破
院乃は時亦再興す。此の金有りづくて時方
方下告礼をさうだることなし。其の事廢り
不至の例。其後ふせ門令を棄めまし
と云ひ座の事。

一懷紙上包一水引毛筆上包の紙上に字跡中央に
和室とちくと有能日以久人を記す。

上
名宗 わ耶一かに

此時八事の如きは檜紙とて文墨一筆で作成

一筆

一吉日に先手引と福師清助と宣りて次乃第
着室へゆきとてその御用事の人に此席を定め
れどもほんの間まに食終ひ

一文壺 一組歌集 一空甕 一紙袋
一鉢 一硯蓋

是ホの家用ミセシ小そと云ひて一筆清助と
あ清ひて之を呈す

と云ひて之を呈す

一家通及福師清助と云ひ是ホの役人の者を遣
へたてある亭主のふ

四時家、美能月夜清助

前よりゆく文意すより蓋言観

喜葉水あくまツテ
ミホ通、毛ま

詠妙紙歌集子本院故の本集物名而徳食

歌の院本
花の徳食

大和亭より人のいわゆるてさかど

とお写送りにそよ下相列往人の内

いねつさたと紙幅中じきすみ沙流紙席

入歌り下て院席に写送り歌ひてお

奉着の清き云乃席百部にそよ長振席

やづり下し少佐を空ノ席にはくとくが洗

志のうた印通の歌のうて。相歌とはうて清江

をもとと志はく歌はくへんちのまくが歌本

うた一毛坐のいねつさたと紙幅中じき

時無日にはく歌ひ入りまつ古歌と章一毛

教書の吟ほを御ゆる歌のうて歌はうて

はうて化の本が詠けりふう吟歌はうて歌はうて

いのうちほく詠吟はうて詠けりふう吟歌はうて

歌はうて歌はうて歌はうて歌はうて

うの事は心地よき事とすま烟のもとすま
すまと心地よき事あ所がとくらのうらへり
ゆふを心地よき

薰膏の被ふる割り文

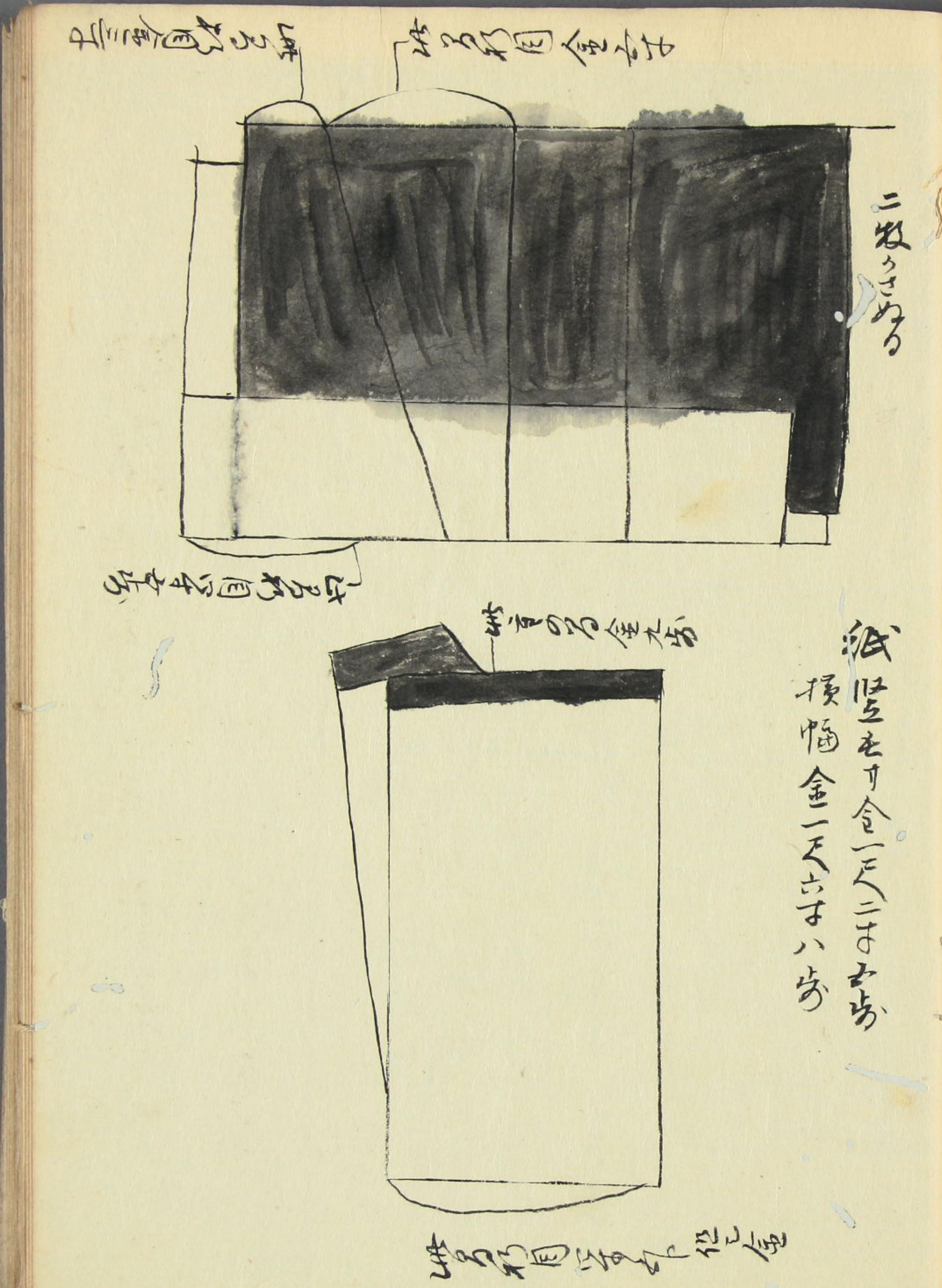
一薰膏の被ふる香あらそうくの膏の影の
香あと流るは一毛弓すえをも去さうく膏は
はれりゆとも名取川に山あらと愈すとう
歌せとくし小ばかりして腰巻にあくわく入ら膏
に並ぶと割せりうるが半とハ云草 宮 月
かと少くやうの歌とゆきくと名取川と流るは
吟ゆれどつり又不の名取川の歌が流入り
とと不の彈きはまちの名取川歌あら家らふと
化の名取川ほどのよきむの名取川の歌
不礼の心もすこ一木の歌やうの筋ふとほのて
三ノ木の名取川歌す、化の名取川ても不礼

以て之を名而之は古事記の象物を含むべし此も而
内名而之を宣めたる小姓の名前とすと食をね
事、其物も猶れど子供等の名而當もたり是が代
名而有りとも云ふ事、此姓とて人には仰れど其
色歎かしゆく有りと在るの如きは大やう相とぬ
詠言て然雖あらうと而之を未だやう相とぬ
うく品じ入るん人にゆづくとてまこと頃々幼少
初伏未熟の人ハ尚も有る。

大手紙の文

一たよ紙、薄や形う十、今世の書の上に何處
かう紙か多もず、京ニ京寺河經師や正統と云ふ二者
亦六種又名紙種川紙などと世間に有る

當時ちわくに傳へりて有る御本ノ御手紙
六時小押ひて用ひらるゝ、蓋ハ四季不變の
信ち大やうねりて用ひそちかく御手紙
ゆきて有りし事あるを知ら



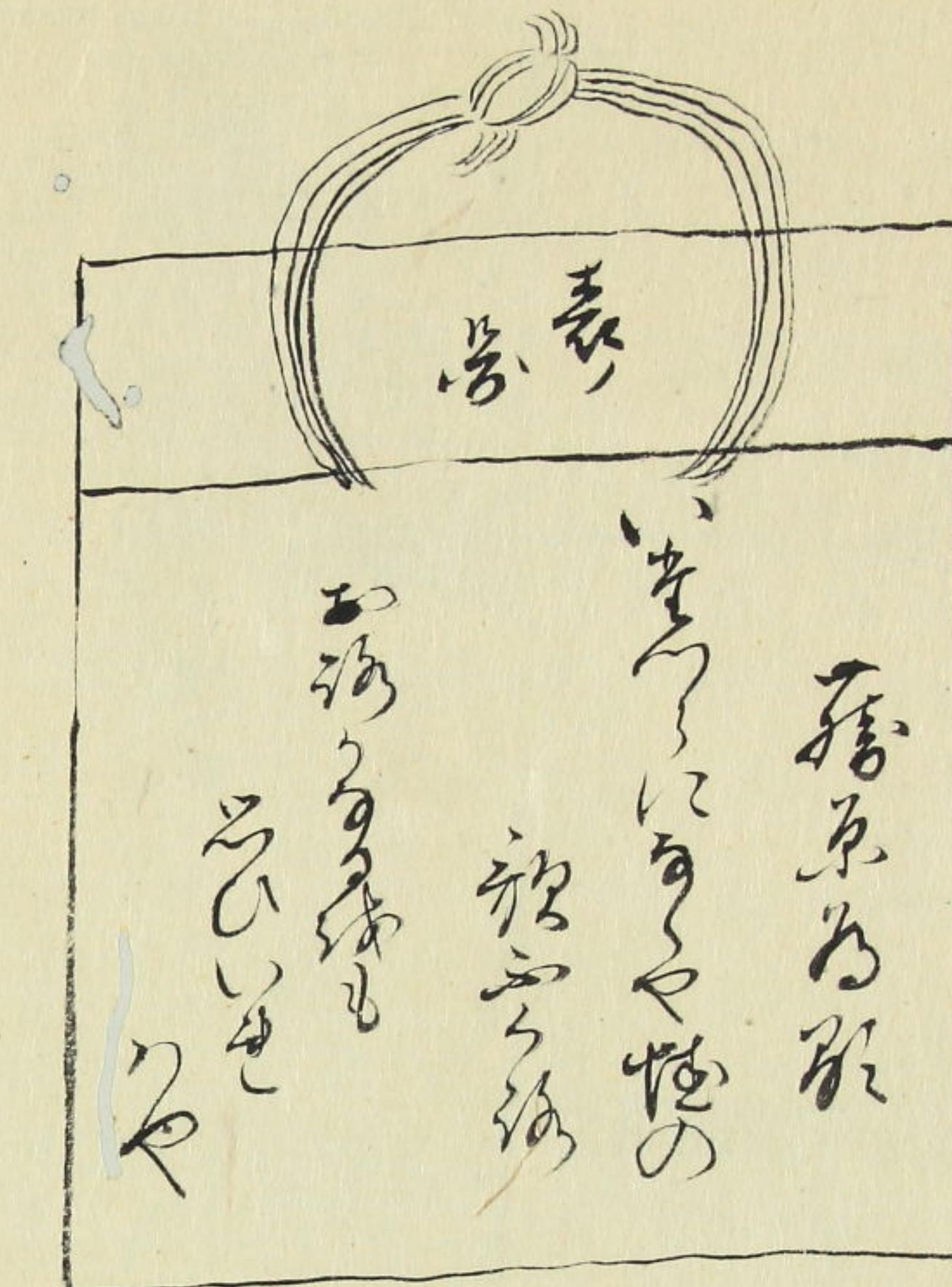
紙、假玉をす金一ノリニナシテ
預金一ノリ六百八十六

ねうやく、西葉和モヨウの紙
紅葉と
様うすら
たとえうておゆのよ
水うき

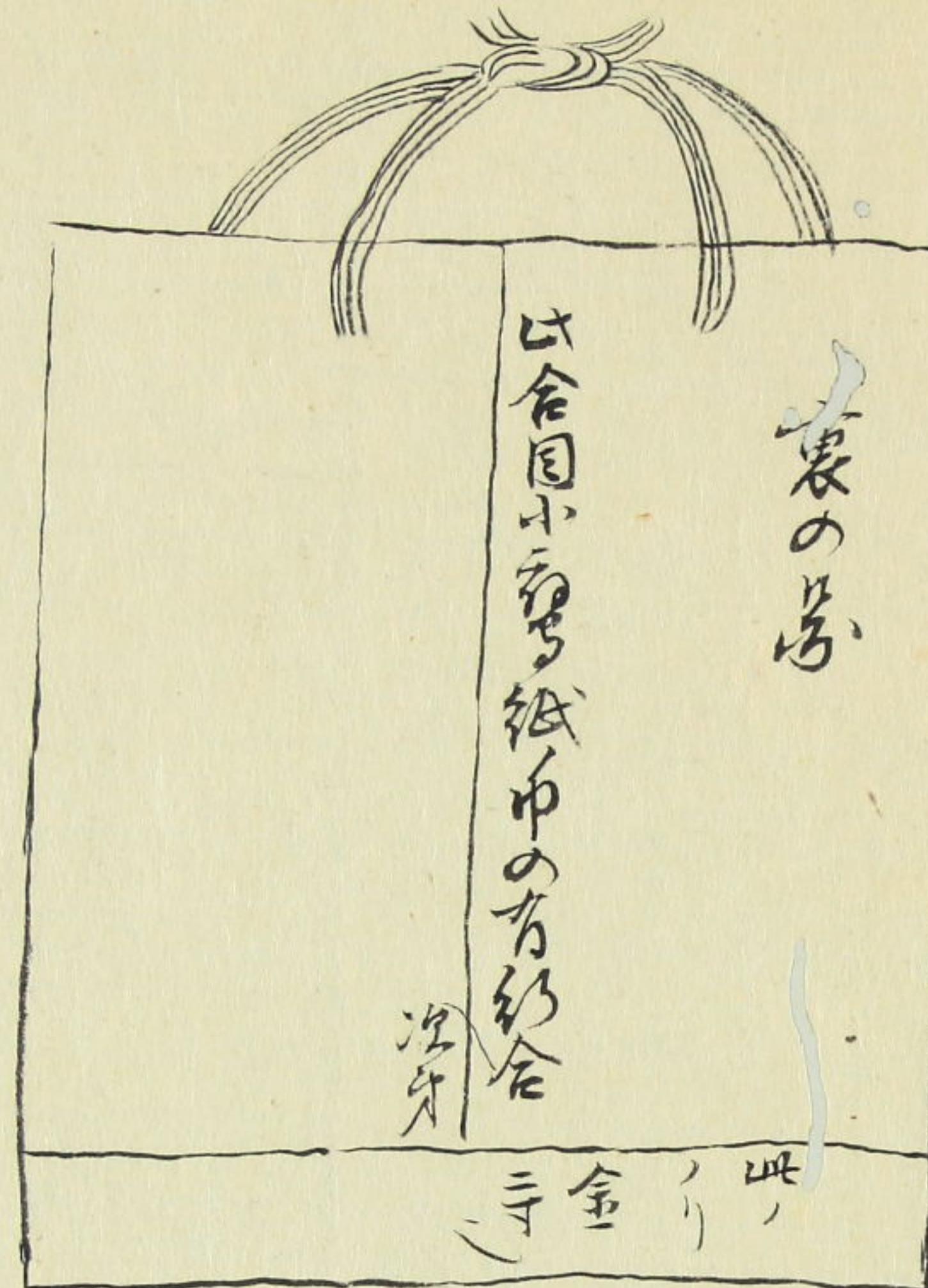
さく、

詠竹袋の形似

一詠竹袋とよき紙ハ詠中と入て壁をも拂毛
とよこ鳥石にあくた



幅金ナシセナ方
長金八寸 上ノ竹目一寸一
右小名カ紙ヨニ申シ合目左セ
ヌサニ取ノアリシノリ付ニテ封ヌ
スソノ合目一寸ニ
此ノ分裏ノ法ス



は合用小名カ紙巾の方納合

金ナシセナ

詠の鳥

一年日のみねとハ丸被よあんとふりん人ハ食ひ初モテ
年日のみねと事

とくに常によつて、事あらば平生常便ゆづらふ
物をゆづくして至長初節にあらうれどもと
ま続ん人へ取次ひきのうれ風もあら霜雪山川
すゑも無難一切の事小大と何うどふ當にゆづけ
りゆくよし教へをやうべと是不うる縁のまゝ誠
きりめ初に時幼タに一のとの上に目とほけんとほけ
ニ附きしむ教小生活の事がうこえうれしと大や謂
ふ事へおにのくいぬほげと不穢惡する事のふとあを
はなをつにまよやとうじて捨る處をかくはまると
あひてとみたる多キどうし和被はまの寝覚
せうやいじゆくと絆ゆき細身してうらかくと
まくらをくらはやふ寝覚ててうらにぞく
ぬきまろ風かふからうかりうねへすじくはせせ
有ぬ旅の旅とゆきて詠うて歌ふは歌ふは歌
うり本當に詠歌大瓶夷祓大國一百人一そく清心也
亦ハ六歌物の文集の連刻もとを集するは傳

自古より古今の歴史から古文書とて記載を以てり

來りてはくも傳へゆるに至らんと云ひた出

れども記載する所ふと神湯宿もあしらひあると

すゆくつりげなまことと云ふ間乃事記載の

やうすらの時代一重のうはほばの人はいつ間

より多く傳わる所ふりには被の間にひれり

きりまこしの面誠ふのことをいまとて傳えう

けりかくの實をうのめどとぞもくさうる乃

鶴の子と有りてやうゆうじゆ。考究する者心肺

内臓とぬるよるすあつてとやうゆうをゆくの常なる

せく一重の

五十九

樟弓(の)かく誰せうてやうゆうをゆく

四〇

内臓をゆくの常なるとやうゆうをゆくの常なる

先の御常じんともくとゆく

新和撰

至重

焉にすれども都のうちあきれぬあがれとゆく

11

佐保瓦屋
り
かくよをあくに大君ふほり
ぬまし行うも
り
きまく吃トツコツ
りとく今爲世人掌ハシモトを取及風船
きとの一とくづく
凡俗ハナレグミのたるのみのとく

憶紙傳上子初之文

一張紙と請願の事と本物の請願
と之は本請願の修訂用已經て請紙の事
ゆえ此紙は請願書と見ゆ

甲 一 二 一 中 音 之 三 之

今
う
ち
か
わ
り
く
ル
一
一
に
こ
ー
川
甲
子

龍吟虎嘯
也足暢氣
而使氣通

たけえ
ひすれにうかべ
ゆゑむ

2

天子入御。驚呼。三呼。有樂鼓奏。臣等叩頭。

小説をうながすやこあやめの公脚の段草
此處にあつては小金を詠吟する所
内々心地も修え、かう様に
納まつて大抵お取らる
系と卷ねて作製
附記
人をも家通
天子の御用能をうなぐ二色
家通大臣の御用能を
うなぐ二色

卷之三

一筆足らず、書類、纏紙
一筆うち、筆記、紙等
甲子
あつさち
之のゆゑ
不川
ト
不
筆

甲
かく
いよ
うき
二
達也
のり
不

あん物用頭事大臣本多三へ納て已下二へ
玄通入候此紙乃候之へ准
納て已下三へニ
大臣本多三へ

化下之云亦過三八人與人二八人者之元

一常に物を詠吟する輕正の技議りうる
ヲ亦欣食の爲縁も以ひ

入門誓約之事

一初讀んとて始て物と取はゆ才乃約此
トより才約此文を下す焉

誓約之事

一古今以下才一代擬集之物物理所之物擬定
曲口能事愚妄體之假上紙焉之是其志不覺體

胸稿お附ヤラ浦山

一稿集物説本切紙之必説よに於せ之奥事
ハ稿而之以本傳言焉以不紙而至本上古傳事
之ゆかくは多寡成りのワガシを別々必対事
仕合紙乃同門た本ニ先ラ讀り合ヤラ浦山

一定家以本傳言必傳之本法而之傳同壁お家
永門内本傳言必傳之本法而之傳同壁お家
化の間之不種事ノ事ノ事は家合云仕合事

右儀利ニ仕ル宗通ノ傳以化シ云々継ム
左ノ事ニ肖ル條目が諸仕テ有リ

右條ニ壁面字下に於右有志

伊勢石清水ノ名前去日往來毛浦川御
宇野長高太東豐松尾彦國旅日本中
天祐化祇之マ義作是也仍右筆書御

年号月日

大正五列

仲郎

右儀利ニ想此名利ハ多般と不同書利之
右摺納ニ紙ち更法大至一ノノ想

壇之起請久の

一壇也ハ之非ト志ケル勅請一可リノ故物と
ナ一別摺納シノ口傳と傳す由財神仰レシ等
此時祕密すノ紙右摺納事の云盟主も

蔚林興亡記文之摺納狀記入

起請文

今後御祝祭集物にてにとどまる正一流三園儀
は御祝疏切紙等の本物下り候事無れりま
前より御賓主上承の門人うなぎ下有難有
在裏山の本物之後種て門人有不申及一子モト露
此處博能ニサシテ右儀ニお傳仕乃浦山の右傳仕
ノ右方外仕トニ遇接之御あうア皆モ儀ニ化ス不仕
ア若カ外仕トニ遇接之御あうア皆モ儀ニ化ス不仕

了了

安樂院五角堂 住持大藏院玉峰院

右御祝疏切紙等の本物下り天湯宮御ち
日本中大小之御祝疏切紙等の本物下り天湯宮御ち
之本件

○号月日

行乞師

姓名互別

互別姓名の本物御祝疏切紙等の本物
煙 痴之互文

一煙の本物御祝疏切紙等の本物
煙 痴之互文

アミターラと如来にはかひと坐すと四天王
アミターラと如来は坐すと四天王

一三神 松本御作 三神もは爲中も 山色御作 如來二幅の縁像も
武者小海源太郎 絹巻院
有り 又一 三神御像作 室町公之作又の事

七面 上御作 在年 次山色御作 在年 下のアミターラは源氏
名前也強被むのみハ無色のアミターラ有り

アミターラ八消えやしりくらの三色包
中古のアミターラと並んでアミターラ紙と勢入
かし絵へうそいこ 山色御作の青通衣
アミターラと並んでアミターラ紙
玉津源のアミターラ青通衣大うちの本小う
きみ色の衣地乃是う絵紋 紙の繪
あ久少林像と有りて考る
此一幅の神と當画一 う少林

右に印紙縁と本と清めく御請 事とて酒通
縄 一戸水用

口洗茶等 消息を亦對署三事用ニ 里手打署

紙 二束署用

三休用ニ 小束紙署用紙用ニ

緋三疋 署之不用

緋ハ緋緋の事

布三疋 も一十九尺

白色緋糸 二包一包署用

茶三把

カ一目也

千葉子三疋 二千束一ヶ

四分之一三疋

相手手賀但

毘在三疋 署三枚用

アラ
荒筋荷三束 署三把

三枚用

手一付也緋糸三疋机に付、之三枚純清ハ緋糸

ウスハ三つ糸の緋う緋諸口下 括約緋糸

緋糸一付

一茶摺の謝式の事とし大切なる事も緋糸

以て已うお詫あ意するて今ハ總便まつて

右行々書けたる一帖も神附瓦御清而一流

の行々と初手入玉文やア一通ハ得とぞり

史記集解卷之二
乃主人の流氣也

是此上之流氣也

子流氣也

此何尔也

此所謂之流氣也

竹子也

此所謂之流氣也

混雜

是那之流氣也

此所謂之流氣也

此所謂之流氣也

此所謂之流氣也

此所謂之流氣也

中人

此所謂之流氣也

白雲山房

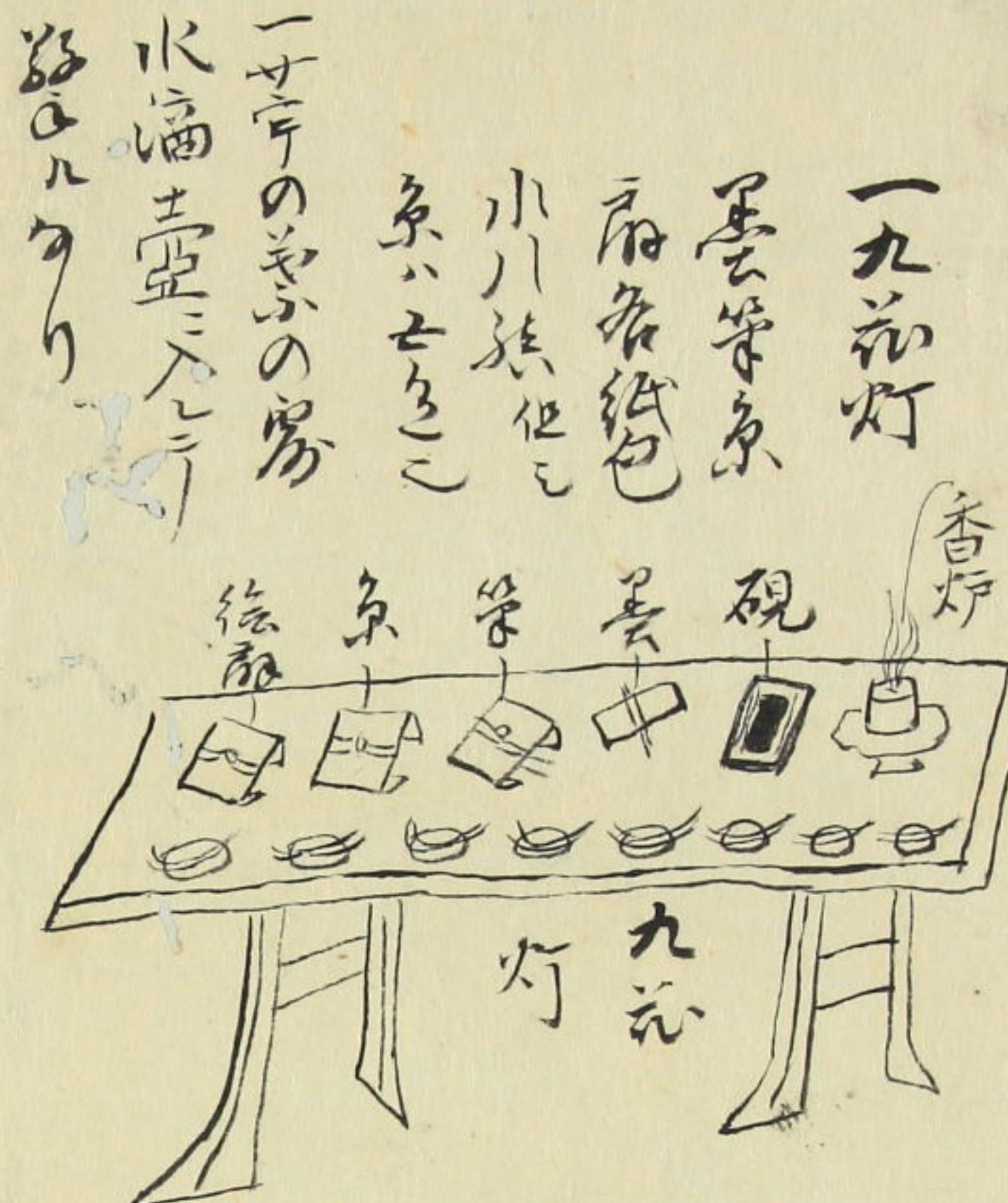
七夕会筋物ノリ

一様獨小 及ハ 番ニ度ル

文臺 沿紙シ室ノ

一絶ニ長毫高也

三脚不院



絹筒 紙包七種

萩原鶴林也而紀着品
カテレニニモモニ

又羅
高草丸高ハリ

麻子丸モリ

赤

一矢りん

小巻ノス小四方ニ
紙包小川紙

一錠

一束 小巻

一束 紙包小川紙

一百糸集百今 伊織の御上 紙包小川紙の上に

紙包葉一枚 紙包小川紙

名前にはすく之所書加

千時寛延二乙巳年四月九日記之三

泉郡坂南莊大安寺蘭長丸

百忙菴看山師

未才

看忙菴

石大安寺ハ禪院ニ本山、五山之内京都惠日山東福寺
之末寺也。御朱印地也。御朱印寺領也。九石計之。

泉郡坂尾村之内領也

布谷神同門角兄弟栗山滿光
考書年號不之知亦不備り。文一丸
至備之中山社家也

五時寛延謹写

千時寛延四辛未歲五月上旬

おもむかしうえにまきあひとゆらぬやうを
おおむかしのうゑひは一有り人れが可候
片手にてうゑを致ひまくと大兵を致ひ明方
以てはテノウシヤリシムシヤリシムシヤリ
シムシヤリシムシヤリシムシヤリシムシヤリ
シムシヤリシムシヤリシムシヤリシムシヤリ
シムシヤリシムシヤリシムシヤリシムシヤリ

馬先

